

## 第29号 合評会議事録

「国語学 研究と資料 第29号」の合評会は、2006年10月21日（土）、早稲田大学文学部キャンパス第六会議室で行われた。参加者は「国語学 研究と資料の会」の庶務と、第29号にご寄稿くださった石黒圭氏、高木美嘉氏、上野左絵氏、また各寄稿者が募った質問者、計9人で行われた。尚、第29号の寄稿者のひとりである施信余氏は都合により参加されなかったので、議事録は上記三名のものをここに採録する。

合評会議事録はこれまで会員に郵送されていたが、今後は掲載された号の次号に採録することとすることとなったので、本号でこれを採録した次第である。

### 【石黒圭】

「文章理解における「関係の予測」という概念の有効性  
—日本語母語話者の予測の実態調査から—」

本稿は、文を単位とした文章理解において、「関係の予測」という概念が有効であることを論証するために、157名の大学生を対象に調査をおこなったものの調査結果です。

一般に、予測というものになじみがない方が多いと思いましたので、当日の発表では予測というものがどのように考えられてきたかという研究史をご紹介します。予測には、大きく分けて、「内容の予測」と「関係の予測」があります。前者は次に来る文の具体的内容を予測するものであり、後者は次に来る文の接続関係を予測するものです。予測という語を聞くと、前者をイメージされる方が多く、そのため「私は次に来る内容を予測しながら読んでいない」とおっしゃる方にしばしば出会うのですが、本稿で扱っている予測は、後者の「次に来る文の関係の可能性を制限する」ものです。その点について誤解がないように研究の背景を説明し、そのうえで本稿の内容をкаいつまんでお話しいたしました。

当日出たご質問やご意見をいくつかご紹介します。どれも根本的な問題点をご指摘くださったものですが、それらは大きく分けて四つに分かれそうです。一つめは実験のデザインの問題、二つめは執筆者やジャンルと予測の問題、三つめは文脈の累積効果の問題、四つめは予測の精度の問題です。

本稿におけるもっとも大きな問題の一つは実験のデザインです。コメンテーターの方から実験についてのコメントを求められたので、①紙を使った実験であ

り、コンピューターベースの実験に比べて精度が落ちる、②「天声人語」という特殊なジャンルの文章なので、他のジャンルの文章では実験の結果が変わる可能性がある、③被調査者が考えた用語を頼りに分析しているので、被調査者によって用語の意味にズレがあっても見抜けない可能性があるという、三つの問題点をお話ししました。また、別の方からは、この実験は、実際の文章理解よりも時間をかけておこなわれ、また予測も意識的になされているので、通常の文章理解の予測と異なっているというおそれがあるという意見も出されました。それについては、その通りであるが、自動化された言語処理の営みを研究する言語研究においては、どの分野においても方法論的に不可避なところがあるとお答えしました。

二つめは、文章の執筆者やジャンルにかんする知識によって、予測が影響を受けるのではないかというご指摘が出されました。これもまたその通りなのですが、執筆者についての知識の多寡は読み手によって異なりますので、考慮はしていませんとお答えしました。また、ジャンルについては、この実験では、執筆者やジャンル、タイトルなどの先行情報は白紙であることを前提にしているので、やはり考慮はしていないが、別の論文ではそうしたことも考慮に入れて検討しているとお答えしました。

三つめは、当初は文章にかんする情報が白紙であっても、文章を読みすすめるうちに、ジャンルや執筆者の見当が次第につくようになるのではないかというご指摘でした。これもまたその通りであり、現在進めつつある研究のなかでそうした視点も取りいれる試みをおこなっているとお答えしました。

四つ目のご指摘は、どのような形態が出てくると予測が可能になるのか、また、その予測の精度はどのくらいなのかというご質問でした。このこともまた、やはり別稿を準備しているところでしたので、その内容を簡単にご紹介しました。

四つのご指摘とも本稿の根幹にかかわるご指摘であり、今後の研究の方向性を考えるにあたり、示唆に富んだコメントをいただくことができました。当日ご出席のみなさまに感謝申し上げます。

### 【高木美嘉】

#### 「行動を促す会話における「受諾表現」の選択について」

本稿は、行動を促す働きかけ（依頼や誘い等）への応答を取り上げ、こうした応答における丁寧さの問題は、「断り表現」だけでなく「受諾表現」にも起こりうることを論述したもので、その結果を日本語教育における会話指導に援用することを目的としています。当日の発表では、まず、本稿の背景として、日本語教

育においてなぜこのような問題設定が必要なのかについて、私自身の考えをお話しいたしました。

本稿をまとめるきっかけとなったのは、自然な依頼の会話の分析でした。発表者は当初「断り表現」の特質を明らかにするために依頼の会話を分析していたのですが、現実の会話のやりとりをつぶさにみていくと、「断り表現」だけでなく「受諾表現」にも丁寧さの問題が絡んでいることがみえてきました。しかし、従来の会話表現の丁寧さに関する論考には、行動展開の意図を実現しない「断り表現」を取り上げるものは多いものの、意図を実現する「受諾表現」にも丁寧さの問題が起こる可能性があることを論述したものはみられません。会話教育の現場でも、相手に合わせた適切な敬語の運用や、丁寧な断りということに焦点が当てられがちですが、現実の会話を行っていく上では、もっと現実在即した多様な配慮の視点を取り入れる必要があると考えました。

当日は、こうした本稿の問題設定の背景をご理解いただいた上で、本稿の結論をご説明いたしました。本稿の結論は、「行動展開表現」に対する「受諾表現」には、働きかけを表す表現類と、理解を示す表現類があり、中でも、働きかけを表す表現類は、「行動展開表現」の特質を持つ点において、表現の選択に注意が必要である」というものです。働きかけを示す「受諾表現」には、「許可系」、「依頼系」、「誘い系」、「申し出系」、「宣言系」、「譲歩系」、「許可求め系」があり、理解を示す「受諾表現」には「はい」や「わかりました」といった表現類があると考えました。

発表会では、この論考に関していくつかの観点からのご指摘をいただきましたが、ここではその中から主要な観点を一つご紹介したいと思います。複数の方から頂いたご指摘に、相手とのやりとりの中で「受諾表現」をどのように認定するか、とまとめられる観点がありました。例えば、働きかけに対する「いいですよ」という応答の表現は、現実の会話の中では許可の意味合いは薄れており、例えば働きかける側の期待に応えている表現と考えることもできるのではないかと、というご指摘を頂きました。同じように、「はい」という表現は、会話の流れの中では、相手は受諾として受け取ったり、あいづちとして受け取ったりする場合があると思われるが、研究においてはこうした受け取り方をどのように分析するか、といったご指摘も頂きました。

ご指摘頂いた、やりとりの中で「受諾表現」はどのように理解されていくか、という問題提起に答えていくには、今後、さらに多くの質の高い自然な会話資料を作成し、緻密な分析を重ねていく必要があると思います。分析においてこうした動的な視点を持つことは、私の会話研究の今後の課題の一つとなりました。示唆に富んだご指摘をくださった当日ご出席の皆様、心より御礼申し上げます。

【上野左絵】

「明和・安永期洒落本におけるタとテイル ―アスペクトを中心に―」

■明和・安永期に限定したのに理由はあるか？

- まずは資料としてまとまった量が得られるということ（『洒落本大成』を利用）
- 口語資料を対象としたかったため、会話体洒落本という選択となった。また上方語的要素を除くために江戸後期のものを用い、明和・安永の時期によるものの中でも上方版のものは除いた。
- ゆくゆくは時代・資料の種類ともに更に対象を広げたいと思っている。（心学道話などの口語資料を考えている）

■上方と江戸で差はみとめられそうか？

- 今回はできるかぎり方言形を対象から除いたため、どれくらいの影響があるかは不明。
- 「～テイル」「～テオル」は問題になってくるだろう。この2つの形をまったく同じとして扱えるかどうかはなお考察の余地がある。

■今回、“明和・安永期の洒落本”が対象だが、他の資料や、これ以前の資料と比べて、特に、洒落本に特徴的なアスペクトの性格はありそうか？

- 現時点で他の時代についての調査は及んでいないが、今後の課題として主に中世以降の資料について調査し、通時的な比較をしてみたい。

■p.2～3 “単なる状態”に関して、「似る」の例は、タ形が1例（他テイル形7例）ということで、「非常にまれな例」のようだが、タ系の1例と、テイル形の7例を比べて、違いはありそうか？また「単なる状態」のタ形が出やすい条件のようなものはありそうか？

- 用例数があまりに少ないので有意な違いとは今のところ考えられない。他資料からも用例を増やして検討してみたい。
- 「単なる状態」のタ形が出やすい条件については、動詞の種類によると思う。福嶋健伸「中世末日本語の～タについて」（『国語国文』71-8 2002）では、状態をあらわす～タの動詞として、

（他動詞）知る、持つ、書く、存ずる、聞き及ぶ、作る、見知る、得る、置く、覚える

（自動詞）似る、済む、違う、劣る、好く、（体の一部が）さし出る、定まる、過ぎる

などを挙げている。また「似る」についてはいわゆる第四種動詞であることも関係しているように思われるが、更に調査が必要。

■未来パーフェクトは日本語教育においては非常に説明しにくいところだが、江

戸時代にはタによる未来パーフェクトの用法はなかったのか。

- 洒落本というジャンルに限ったことにより、あまり複雑な構文の用例を採ることができなかったという要因もあるが、本資料中ではタによる未来パーフェクトと考えられる用例は見あたらなかった。

■ テイル形の「似る」の用例はいずれも「似ていなんす」と遊女のものだが、位相的な特徴といえるのではないか？

- 指摘のとおりだと思う。洒落本の性質上どうしても遊女のせりふが多くなるため、他の資料にあたることでさまざまな発話者による用例が得られるのではないかと思う。

■ p.4 「こまりました」は「発話時の状態」か？

- 本用例は発話時と話の内容の時制がずれているため、御指摘の通り「発話時の状態」として適当なものではありませんでした。大変申し訳ありませんが訂正いたします。

■ タ形による遂行文の用法について、現代語との違いが興味深い。他の資料についても当たってみる価値があるのではないか。

- 今後の課題として注目していきたい。

今回の合評会では資料、位相、通時的な観点などから、不備だらけの論文に多くの課題や更なる調査テーマの可能性をご指摘いただきました。出席者のみなさまにあらためて感謝申し上げます。

---

以上、合評会議事録でした。

ご多忙中にも関わらずご出席いただきました寄稿者、質問者の皆様、どうもありがとうございました。